

午後 12 時。本挿話は唐突に、演劇のト書きから始まる——「マボット通り夜の町の入口 (*The Mabbot street entrance of nighttown*)」(U-Δ 15.105)¹の不衛生で不気味な状況がまず描かれ、二人の英兵のそばをスティーヴンとリンチが通り過ぎる。冒頭から第 13 挿話に登場した、シシー・キャフリー、イーディ・ボードマン、さらには双子のトミー&ジャッキー・キャフリーも登場するが、サンディマウント海岸からの距離や、真夜中という時間を考えても、彼らが実際にこの場にいるわけではなく、本挿話の「夢幻劇(dream play)」においては、彼らを与えられたその役を演じているに過ぎないということは注意が必要だ(この意味において、現実と幻想を分けることはそれほど重要ではない)。



やがて「向うの鉄道橋の下にブルームが現れ」(U-Δ 15.115)、トールボット通り 72 番の「オルハウセン豚肉店」で「生温かい豚の腿肉」と「冷たい羊の脚肉」を購入する。道路を横切ろうとしたブルームは危うく「大型砂撒き電車」に轢かれそうになるが、なんとか彼もマボット通りにやって来る。ブルームの父ルドルフとエレンが現れ、息子を叱責するも、「ポールディ！」という声と共に「トルコふうの衣装を着た大柄な美女」モリーが駱駝に乗って現れ、《ドン・ジョバンニ》を口ずさみながら去ってゆく。その後、客引き女に呼び止められたブルームはしばしの間ブライディ・ケリーやガーティ・マクダウェルと会話をしたのち、昔の恋人であるミセス・グリーンと昔話をする。マボット通りとティローン通りの交差点にあった「地獄門」(U-Δ 15.151)を抜けたブルームは、「おれはなぜ彼のあとをつける？ でもな、やつらのなかではあれが一番ましなんだ。もしミセス・ボーフォイ・ピュアフォイのことを聞かなかつたら、あそこに行きもしなかつたし会いもしなかつたろう。キスマットだよ。宿命ってやつ」(U-Δ 15.156)と考える。

犬にまともわりつかれて困ったブルームが「豚の腿肉と羊の脚肉」を放り投げてやると、二人の夜警は彼が立小便をしていると勘違いし、尋問をする。ブルームの帽子から「カード」が落ち、ヘンリー・フラワーという名前が明らかになると、そこにヴェールをかぶったマーサが登場し、彼を非難する。その直後、突如として場面は裁判に切り替わり、ミスタ・フィリップ・ボーフォイ(第 4 挿話の大便中にブルームが読んだ懸賞小説の作者)や女中のメアリ(その昔ブルーム家にいたことが第 18 挿話で明らかになる)が彼を非難し、J・J・オモロイの弁護も空しく(U-Δ 15.180)、彼は絞首刑を言い渡される。再び場面が二人の夜警に詰問される場面に戻ると、「ビーグル犬がパディ・ディグナムの灰いろの壊血病やみの顔になり、ブルームの無実を証明する(U-Δ 15.199)。

「ピアノの音が聞え」「男の弾き方だ」と感じたブルームは「ここかもしれない」と思い、ティローン通り「八一番地」²のベラ・コーエンの娼家に入ろうとするが、その前に若い娼婦、ゾーイ・ヒギンズにお守りの

¹ 右の写真(Georgian housing in Summerhill, Dublin)は Wikipedia (Wikimedia Commons)より (<https://en.wikipedia.org/wiki/Monto>)

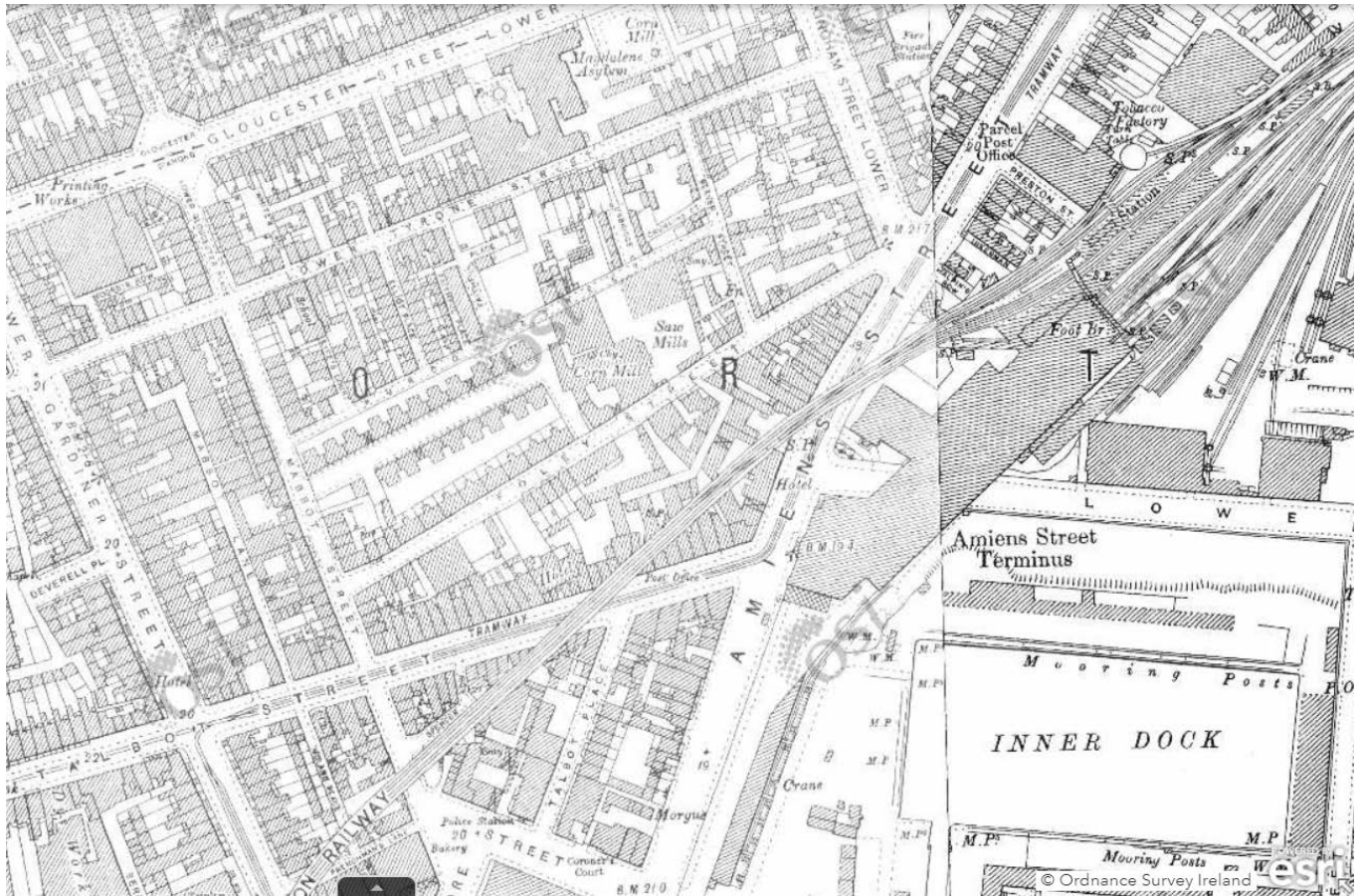
² 実際にはベラ・コーエンの娼館は「82 番地」にあった(Gifford 469)。

「じゃがいも」を奪われてしまう。ゾーイに唆されて演説を始めたブルームは、「市長」(U-Δ 15.212)、そして「皇帝」(U-Δ 15.219)——「来るべき黄金の都市、未来のノワ・ヒベルニアのブルームサレム」(U-Δ 15.225)——となるが、すぐさまその座を追われる。医師マリガンからは「両性具有の異常体質」(U-Δ 15.242)、医師ディクソンからは「新しい女性的男性の完璧な症例(a finished example of the new womanly man)」と診断されたブルームは、「黄と白の子供ら八人を生み落す」。その後も、イエスのように様々な「奇蹟(miracle)」(U-Δ 15.245-46)を行って見せるが、火刑に処され「炭化する」(U-Δ 15.255)。

現実に戻り、ゾーイの後を追ってブルームが娼家に入ると、ステイーヴンとリンチ、さらには二人の娼婦、キティとフロリーがいる。やがてブルームの祖父、ヴィラーグ・リポティ(U-Δ 15.282)が性に関する雑学を語ると、ゾーイが二日前に「司祭(a priest)」がやって来たことを明かし、今度はステイーヴンが「全アイルランド首座大司教ディーダラス枢機卿下サイモン・ステイーヴン」(U-Δ 15.308)となる。そんな中、「どっしりした売春宿の女主人ベラ・コーエンが現れる」(U-Δ 15.315)。ブルームのマゾヒスティックな願望が明らかになると、それを充足させるかのように、ベラは「ベロー」(U-Δ 15.322)という男性に変わり、女性となったブルームを踏みつけ、叩き、鞭打ち、馬乗りになる。その幻想もブルームの「ズボンの尻のボタン」(U-Δ 15.371)が弾け飛ぶことで終わり、彼はゾーイからジャガイモも返してもらおう。ステイーヴンがベラに言われるがままに金を払ったとき、ブルームはそれが余分な支払いであることに気づき、ステイーヴンの金を預かっておいてあげたり、煙草を取りあげて、何か食べるべきだと言う。やがて(ブルームの空想の中で?) ボイランがやって来ると、ブルームはマダム・トウィーディの下男役を演ずることとなり、鍵穴越しにボイランとモリーの行為を覗き、興奮する。その幻想が晴れた直後、「ステイーヴンとブルームは鏡を見つめる」と、「ひげのないシェイクスピアの顔が鏡に現れる」(U-Δ 15.403)。

その後、自動ピアノが奏でる「おれのあの子はヨークシャ娘」に合わせてステイーヴンが娼婦たちと踊り出す。「ふらふら旋回する」彼のもとに、母の亡霊が現れ、「悔い改めなさい」(U-Δ 15.433)と彼を責め立てる。ステイーヴンは「《ノートゥングだ!》」と叫び、トネリコのステッキでシャンデリア(実際には、ガス灯のシェード)を叩き割り、この場を走り去ってしまう。ブルームが彼の後を追いかけると、ステイーヴンは本挿話冒頭に現れた英兵二人(カーとコンプトン)と口論をしている。どうやら原因は英兵と一緒にいたシシー・キャプリーにあるようだ。ブルームは何とか仲裁をしようとするが、英国王を侮辱したことに腹を立てたカーによってステイーヴンは殴られてしまう。運悪く、(先ほどブルームを尋問していた)二人の夜警に見つかるも、そこに裏で警察の密偵をしているという噂のコーニー・ケラハーが通りかかり、その場をうまく収めてもらう。

ケラハーを見送り、ブルームは意識を失ったままのステイーヴンを介抱する。「顔を見ていると、これの亡くなった母親を思い出すよ。……ファーガソン、そう言ったようだが。娘。どこかの娘だ。これからさきにもっともっといいことがあるさ(Best thing could happen him)」と夜に向かって語りかけるブルームのもとに、最後の「人影が現れる」。11年前に生後11日で亡くなった最愛の息子の成長した姿である——「十一歳の妖精の少年、誘拐された取替え子、イートン校式スーツにガラスの靴、小さなブロンズの兜、手に一冊の本。聞き取れない声で右から左に読み、微笑し、ページに接吻する」。驚きのあまりブルームは、声なき声で「ルーディ！」と呼び掛けるも、ルーディは微笑んだまま、その「チョッキのポケットから白い子羊が顔をのぞかせてい」たのだった(U-Δ 15.494-95)。



○この地図は下記のサイトより引用。

<https://webapps.geohive.ie/mapviewer/index.html>

☆参考文献

川口喬一 『「ユリシーズ」演義』 研究社出版、1994年。

結城英雄 『「ユリシーズ」の謎を歩く』 集英社、1999年。

Gifford, Don with Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated: Notes for James Joyce's Ulysses*. U of California P, 1988.

Killeen, Terence. *Ulysses Unbound: A Reader's Companion to James Joyce's Ulysses*. 2nd ed. Wordwell, 2005.